

1 自己評価

I 評価結果

(別紙参照)

II 分析・改善策

(1) 倉敷天城中学校と倉敷天城高等学校が有機的に協力し、充実した教育活動のできる学校運営を行う。

- ・中高合同で中学3年生の進路検討会を行い、生徒個別に普通科・理数科への適性等を検討し、保護者懇談でアドバイスを行った。
- ・各学年3回の情報提供の場を設けられた。保護者アンケート「本校では、なるほどプロフェッショナルやチャレンジワーク、大学訪問があり、その時間は将来の進路や職業を考えるうえで役に立っている」の結果は令和5年度 83.1%に対して令和6年度は 96.5%であり、昨年より上昇した。
- ・高校教務課との連携では、高校授業の直接参観を実施した。生徒は理数科と普通科の特徴を理解した上で、適切に進路選択ができた。また、進路課との連携により倉敷天城高校への進学に向けた適切な情報を生徒・保護者に提供でき、高校での生活や学習に、より具体的なイメージをする機会を持つことができた。

(2) 開かれた学校づくりを推進し、適切な情報発信を行うとともに、地域と連携することで教育活動を充実させる。

- ・第1回のオープンスクールは全クラス公開授業を2限実施し、参加者は昨年度の440組から500組に増加した。第2回オープンスクールは30分間の体験授業、学校紹介、入学者選抜実施要項説明、教員による質問コーナー、保護者による質問コーナーを行い、参加者は昨年度の250組から350組に増加した。来年度も効果的な広報活動と情報発信をして、さらに参加者数を増やしたい。
- ・学校行事、学年、部活動など、昨年5月からほとんど制限のない活動ができた。東雲祭(学園祭)の体育の部では福田公園によるエアコンの効いた屋体で実施できた。第2学年の広島宿泊研修(6月)と第3学年の関東修学旅行(11月)では、本校の特色ある取組をコロナ禍以前のレベルで実施することができた。また、タイムリーなブログアップなどホームページを通した情報発信数をすべての教員が取り組んでいる。
- ・近隣地域のボランティア活動等への参加が少ないので、次年度は改善したい。

(3) 本校生徒に求められる基礎学力とこれからの時代に求められる学力をあわせて身に付けさせ、各生徒にふさわしい進路実現の基礎を培う。

- ・3月の課題研究発表会は、コロナ禍以前のレベルで実施し、1・2年生、3年生保護者、他校生徒(津山中学・岡山操山中学)と一緒に対面でポスターセッションやステージ発表を行い、参集およびリモートによる大学の先生の指導も実現した。生徒には有意義な発表会となった。また、横浜市立サイエンスフロンティア高等学校附属中学校生徒が10月に来校して、課題研究交流会を行った。各種課題研究のコンテスト等への参加は複数件あり、「日本学生科学賞」中央審査で入選1等、地方審査で県知事賞と読売新聞社賞を受賞した。
- ・学習計画表の点検や、学習時間と試験の成績を分析する等により、個別指導や全体指導を行うことにより、家庭学習時間の確保に努めた。調査では1日あたり、平日平均66分、休日平均132分となり、学校目標である平日平均90分、休日平均150分を下回った。
- ・教科指導で、理科の発展学習、数学・英語の基礎学習など、始業前、放課後に学習会を行った。

(4) 異年齢の集団、多様性のある集団を活かし、豊かで多様な体験等を通じて、思春期にふさわしい人間的成長を遂げさせる。

- ・天城小学校との交流では、「睡眠と健康」について中高保健委員会で動画を作成し、天城小学校へ行って小学校の全クラスで交流を行った。ライフスキル教育には、各学年2回実施した。「周りへ

の思いやりや自己受容の高まり」が感じられる生徒の感想が多く見られた。ピアサポート活動の全学年2回実施した。生きる力を育む教育の主軸として、今後も充実させていく。

- ・教育相談では、ケース会議による情報共有、スクールカウンセラー相談などを行った。相談希望件数も増加傾向にあり、多様な生徒・保護者の悩みに対応するため、SC（スクールカウンセラー）やSSW（スクールソーシャルワーカー）の協力を仰ぎながら、可能な限りの手立てをとっている。また、今年度から自立応援室の運用が始まり、教室に入りづらい生徒の居場所として機能している。
- ・AMAKI 学で、平和、人権、職場体験など幅広い人間形成に必要な学習を進めた。

（5）適切な教育環境の整備・管理に努めるとともに、心身ともに健康な生徒の育成のための環境づくり、指導に努める。

- ・各授業において、Google サービスを活用して小テストやスライド作成、ファイル共有などを積極的に行い、生徒の一人一台端末を主体的に活用しながら探究する「STAGE3」に相当する活用ができた。また、学力保障のためのオンデマンド配信やリモート授業も定着した。
- ・全校生徒への交通マナー向上のための呼びかけと啓発ポスターを作成している。今後は、家庭の協力も得ながら積極的に交通指導をしていきたい。また、自転車で登校している生徒以外にも、全校生徒に自転車の安全で適正な利用促進に資する交通安全教育を実施している。
- ・自転車を利用する全校生徒及びその保護者に対し「自転車損害賠償責任保険等に関する情報を提供しよう努めている。
- ・教育相談、スクールライフ、日常の学校生活を通して生徒の心身の状態を把握し、生徒課会議や職員会議、職員朝礼を通して、教員間での情報交換を密に行うことで、学校としてまとまりのある指導・支援を行った。

2 学校関係者評価委員名

槇野 滋子（岡山大学学術研究院教育学域教授（特任））

山田 耕三（ベネッセコーポレーション初等中等教育事業本部アセスメント開発部）

北村 増紹（藤戸寺住職） 寺地 治見（元 PTA 役員） 若林 美代子（本校 PTA 役員）

3 学校関係者評価

- ・具体的取組の総合評価は客観的な指標からAを付けた課・室・学年が増えた。
- ・学校自己評価アンケートの、教職員への質問で「研究テーマに基づいた公開授業や教員同士の参観授業が行われている」という項目の肯定的回答が低かったのはどうしてか、という指摘の回答として、本校職員は天城の誇りをもって、もう少し研究したいという気持ちの表れであると回答した。
- ・学校自己評価アンケートの、教職員への質問で「中高で連携した教育指導が行われている」という項目の肯定的回答が低かった指摘をうけ、次年度より中高連携推進委員会を新設することにした。

4 来年度の重点取組（学校評価を踏まえた今後の方向性）

- 1 生徒一人一台端末を有効に活用し、主体的・対話的で深い学びに向かう授業を深化させる。
- 2 進路指導、学習指導、学校行事、部活動など、中高の更なる連携等を進める。
- 3 心の居場所推進プロジェクトの実践を通じ、長期欠席、不登校生徒への組織的対応の強化を図る。
- 4 中高一貫教育校として、高校卒業後の進路をイメージさせ、生徒自らが目的を持って学習に取り組むことができるよう、進路指導のさらなる充実を図る。
- 5 業務の見直しや精選、平準化を行うとともに、ICTを有効に活用することで、教職員の働き方改革を一層推進すると同時に、部活動の在り方も引き続き検討し、ゆとりと意欲の更なる創造を図り、教育活動の質を高める。
- 6 特別活動、課外活動、校外の活動などに、主体的に取り組ませることを通して、より良い対人関係能力やたくましさを育成する。
- 7 きめ細かいクラス運営や各種相談を通じて、的確に生徒理解を図るとともに、生徒の自己有用感を涵養する。
- 8 オープンスクールを充実させるなどをして、学校の魅力を地域の方や小学生とその保護者に丁寧に情報発信をしていく。